

予報文決裁用

令和4年第1回一都三県サバ漁海況検討会

令和4年漁期サバたもすくい網漁、棒受網漁の見込み

令和4年1月6・7日

参加機関：東京都島しょ農林水産総合センター、神奈川県水産技術センター、静岡県水産・海洋技術研究所、千葉県水産総合研究センター

協力機関：水産研究・教育機構水産資源研究所、茨城県水産試験場、漁業情報サービスセンター

1 予測

(1) 海況

【予測（2022年1～6月）】

黒潮大蛇行が継続し、A型基調で推移する。

黒潮は、銭洲周辺及び三宅島を通過することが多く、これらの海域は水温が「高め」基調になる。伊豆諸島北部海域は、黒潮からの暖水波及時には水温が「高め」となる。房総沖は接岸傾向で、水温は「平年並」～「やや高め」になる。

漁場水温は、北部海域では1月上旬18～19℃、1月中旬16～17℃、1月下旬～2月下旬15～17℃で推移する。三宅島周辺では、1月上旬18～20℃、1月中旬～2月上旬17～18℃、2月中～下旬16～17℃で推移する。銭洲周辺では、1月上旬19～20℃、同中旬19℃、同下旬～2月中旬17～18℃、同下旬16～17℃で推移する。

【説明】

1月5日現在、黒潮は、四国沖から紀伊水道沖で蛇行した後、北上部が潮岬に接岸し、銭洲～三宅島付近で南へ迂回した後、房総沖を北東に流れている。漁場水温は、北部海域18～19℃、三宅島19℃、銭洲海域19～20℃であった。

黒潮は期間を通じてA型で推移し、伊豆諸島海域の西側を北上する。その後、熊野灘～遠州灘沖で向きを東に変え、銭洲周辺や三宅島周辺を通過しやすい。このため、これらの海域では漁場水温が上昇する。また、北部海域へも黒潮からの暖水が波及しやすく、波及時には漁場水温が上昇する。一方、房総沖では期間を通じて概ね接岸傾向で推移し、黒潮から暖水が波及しやすい。

なお、1月中旬～2月下旬の水温は水産研究・教育機構水産資源研究所の海況予測システム（FRA-ROMS）を参照した。

海況予測の考え方

黒潮流路については、12 月の長期海況予報を参考にする。

2 か月後までの黒潮流路及び水温は、FRA-ROMS 等を参考にする。ただし、現況を優先する。

大蛇行型の場合

- ・ 漁期中は A 型流路（A 型は継続期間が長い）
- ・ 伊豆諸島海域は、水温高めで推移

非大蛇行型の場合

- ・ 西の小蛇行の位置と規模を確認する。（都井岬に蛇行部があれば、2～3 か月後に伊豆諸島海域に到達する）。
- ・ 4 月以降は長期予報のとおり。
- ・ N 型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」～「平年並」、三宅島付近は「平年並」～「高め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」。
- ・ B 型流路の時、伊豆諸島北部海域は「高め」～「極めて高め」、三宅島付近は「高め」～「極めて高め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「やや接岸」。
- ・ C 型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」で暖水波及時に一時的に「高め」、三宅島付近は「低め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「著しく離岸」だが、伊豆諸島東を S 字に北上する場合には「接岸」。

(2) 漁況

①マサバ

【予測 (2022 年 1～6 月)】

(ア) 来遊量と漁獲量

3 歳魚 (2019 年級群) は前年を下回る。4 歳魚 (2018 年級群) は前年を上回る。
5 歳魚 (2017 年級群) は前年並。6 歳 (2016 年級群) 以上は前年を上回る。
全体としては前年を上回る。

(イ) 漁期・漁場

初漁は 1 月中～下旬に伊豆諸島北部海域 (利島～大室出し) となる。主漁場は漁期を通して伊豆諸島北部海域となり、盛漁期には銭洲周辺海域及び三宅島周辺海域にも漁場が形成される。漁期後半は伊豆諸島北部海域が主漁場となるが、5 月以降低調となる。

(ウ) 魚体

29～32cm 主体の 4～5 歳魚に、34～39cm 主体の 6 歳以上が混じる。
※年齢は年初に加齢し 2022 年時で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量・漁獲量

来遊資源は、加入量が卓越した水準である 2018 年級群 (4 歳魚) と近年 (最近 10 年) の平均を下回る水準の 2017 年級群 (5 歳魚) 及び加入量が近年の平均程度の水準の 2016 年級群 (6 歳魚) 以上が主体になると考えられる。加入量が卓越していた 2013 年級群 (9 歳魚) を含む 2015 年級群 (7 歳魚) 以上の残存資源量は近年としては多い。

2016 年級群 (6 歳魚) は、近年の平均程度の加入量であるが、6 歳魚の残存資源尾数は前年を大きく上回ると推定された。

2017 年級群 (5 歳魚) は、近年の平均を下回る水準の加入量であり、残存資源尾数は前年の 5 歳魚を下回ると推定され、2022 年 1 月時点における残存親魚量は 16% を占めるにすぎない。

2018 年級群 (4 歳魚) は、卓越した水準の加入量であり、2022 年 1 月時点における残存親魚量の 54% を占めているが、加入量の見積もりの不確実性は依然として高い。

卓越的な加入量であった 2013 年級群以降、過去の高水準期と比較しても成長は遅くなっている (由上ら「令和 2(2020) 年度マサバ太平洋系群の資源評価」)。

この成長の遅れに伴い成熟開始年齢の高齢化がみられており、2016 年漁期以降の年齢別成熟割合は、2 歳魚は 0%、3 歳魚は 30% と仮定した。

各年級群の状況を考慮した上で、2022 年 1 月当初におけるマサバ来遊資源量 (3 歳魚の一部と 4 歳以上) は、前年を上回ると推定された。

海況は、前年と同様に黒潮流型は A 型基調で推移すると予測されていることから、漁獲割合 (漁獲量 / 来遊資源量) は同じく A 型で推移した 2018～2021 年漁期平均の 0.19% であると仮定すると、漁獲量は 4,502 トンと試算され、前年を大きく上回る

（前年比 144%）と考えられる。

マサバ来遊資源量には 3 歳魚の一部が計上されているが、2021 年 10～11 月に北部まき網漁業による銚子水揚げ物の明け 3 歳魚（2019 年級群）の尾叉長は、26～31cm であったが、そのうち 80%以上が 30cm 以下であった。近年のマサバ太平洋系群の成長は遅くなっており、成熟開始年齢の高齢化も見られる。伊豆諸島海域への回遊は産卵回遊であり、現在 3 歳魚の成熟割合は 30%と仮定されているが、想定以上に成熟率が低い場合には伊豆諸島海域への 3 歳魚の来遊量が少ない可能性がある。また、今期の千葉県漁船数、規模に変更はないが、静岡県船 1 隻が撤退している。これらを考慮すると、推定された漁獲量（4,502 トン）は過大評価の可能性があるが、前年を上回ると考えられる。

初漁日、漁場

北部まき網漁業の 2021 年 12 月中下旬の漁場は鹿島灘沖～犬吠埼沖であり、2020 年 12 月下旬（金華山沖～犬吠埼沖）よりも南に形成された。2021 年 12 月の緯度経度 5 分ごとに集計した漁場水温の平均は 15.7℃であり、2020 年 12 月平均（13.5℃）より高かったが、2015～2019 年平均（16.2℃）よりもやや低かった。2022 年 1 月 6 日夜の漁場は犬吠埼沖が主漁場であり、2021 年 1 月上旬（金華山沖、相馬沖）よりもかなり南に形成された。漁場水温は、16℃前後であり前年同期（12.4℃）より高かった。2021 年度第 2 回太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報によると、黒潮は房総沖では接岸傾向であり、黒潮から暖水が波及しやすく、沿岸水温は「平年並」～「やや高め」と予測されている。

12 月末時点では、鴨川市漁協所属のハイカラ釣漁船は出漁していない。

千葉県漁業調査船ふさみ丸により 12 月 22 日に実施した九十九里沖におけるさば類調査（ハイカラ釣り）では、尾叉長 29～39cm（モード 32cm）、体重 250g モードのマサバがゴマサバに混獲されたが、細身の個体がほとんどであった。2022 年 1 月 6 日に行った千葉県ふさみ丸によるハイカラ釣り調査では、九十九里沖において尾叉長 30～39cm（モード 36～37cm）、体重 400～450g モードのマサバが釣獲された。さらに、同日の御宿沖ではゴマサバ主体に漁獲され、マサバは混じる程度であった。

また、外房沿岸の定置網では 12 月中にマサバ大型個体の入網は確認されていない。

これらのことから、2022 年 1 月 7 日現在、マサバ南下群の先端は九十九里沖のミゾ場周辺まで回遊しているものの、魚群の本体は犬吠埼沖周辺海域に滞留しているものと考えられる。

2022 年 1 月 7 日現在、神奈川県、静岡県の調査船による調査は行われていない。

以上、関連情報は少ないが、まき網及びハイカラ釣り並びに棒受網、たもすくい網の漁況経過から、1 月上旬時点では、南下群の主群は犬吠埼沖周辺海域にあり、前年よりは南に位置するものの、例年より南下は遅れていると推定される。一方、黒潮は現時点では房総沖での離岸は見られず、沿岸には黒潮からの暖水が波及している。このため、同海域での魚群の南下は妨げられている可能性がある。しかし、水研機構

の海況予測モデル（FRA-ROMS）や気象庁の予測モデルによると、外房沖では1月中～下旬に黒潮がやや離岸する可能性がある。一方、伊豆諸島海域では、これらモデルによると、少なくとも2月下旬まで黒潮は銭洲～三宅島付近を東進し、同海域は暖水に覆われやすい。親魚量の増加傾向が顕著となった2013年漁期以降、三宅島周辺海域が初期漁場となっていたが、2020年漁期は同海域が黒潮流路内にあったことから北部海域が初期漁場となった。また2016年漁期以降では、盛漁期には過去の高水準期と同様に、銭洲海域でも再び漁場が形成されるようになった。

漁場水温は、伊豆諸島北部海域では1月上旬は18～19℃、同中旬は16～17℃、同下旬～2月下旬は15～17℃で推移する。三宅島周辺では、1月上旬は18～20℃、同中旬～2月上旬は17～18℃、同中～下旬は16～17℃で推移する。銭洲周辺では、1月上旬は19～20℃、同中旬は19℃、同下旬～2月中旬は17～18℃、同下旬は16～17℃で推移する。

以上のことから、昨年よりやや早く1月中～下旬に伊豆諸島北部海域で初漁になると考えられ、その後も黒潮は伊豆諸島海域の西側を北上した後、銭洲～三宅島付近を東進するため、伊豆諸島北部海域が主漁場となる。一時的に黒潮が南偏し、黒潮や黒潮からの暖水波及が弱まると銭洲周辺海域にも漁場が形成され、一時的に三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

魚体

伊豆諸島海域へ来遊するマサバは主に2歳以上であったが、2013年級群以降、成長の遅れが顕著となり、成熟するのは3歳魚の一部と4歳以上となっている。

北部まき網で2021年11月以降に漁獲されたマサバは、28～35cmの明け4歳魚（2018年級群）～明け5歳魚（2017年級群）が主体となり、26～28cm前後の明け3歳魚（2019年級群）と35cm以上の明け6歳（2016年級群）以上が混じった。

このうち11月は31～34cm前後が主体であり、南下群の漁獲が本格的となった12月の魚体には34～36cmの大型魚も加わった。

このことから、漁期初めの魚体は34～36cmの明け6歳魚（2016年級群）～明け7歳魚（2015年級群）主体となるが、その後28～35cmの明け4歳魚（2018年級群）が主体となる。明け3歳魚（2019年級群）は30cm未満が多く、伊豆諸島海域への来遊は少ない可能性がある。35cm以上の大型魚の来遊は少ない。

北上期

漁期終盤にマサバ主漁場への20℃以上の暖水波及があるときは、北上が開始される。近年、4月に入ると、1夜1隻平均漁獲量が減少する傾向がある。黒潮は予測期間中A型で推移するが、4月以降の北上流路の位置は現時点では不明であり、近年の傾向から判断した。なお、伊豆諸島より西方の海域（熊野灘など）に回遊した大型魚は、5月以降に来遊する傾向がある。

【マサバ予測の考え方】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量

昨年 6 月末時点のマサバ資源尾数から、7～12 月の漁獲尾数及び自然死亡尾数を減じた尾数を年末時のマサバ資源尾数とする（水研機構データ）。これに、各年齢の平均体重を乗じた量を資源量とする。そのうち、4 歳魚以上と 3 歳魚の一部を産卵親魚と考える。

漁獲量

漁獲割合（推定来遊資源量に対する漁獲量の比率）は、2000 年代前半は 0.05%以下で推移していた。2011 年以降の漁獲割合は 0.08～0.89%の間で推移しており、直近 4 か年（2018－2021 年）の平均漁獲割合は 0.19%である。

初漁日、漁場

- ・ 漁期初めの 1～2 月におけるマサバの集群は黒潮系暖水の影響下（16℃以上）の瀬にみられ漁場が形成される。【過去 10 か年（2012～2021 年）の初漁時の漁場水温（海面）は 15.0～19.6℃（平均 17.9℃）】
- ・ 2012 年までは、漁期初め（産卵期前、1、2 月）の漁場は、ほとんどがひょうたん瀬～大室出しであった。【2013～2015 年は北部海域が低水温となり、三宅島周辺海域で初漁がみられた。産卵盛期には、三宅島周辺海域に漁場が形成されることが多い。】
- ・ 親魚量が増加傾向にある 2016 年漁期には、初期漁場は三宅島周辺海域、盛漁期には銭洲海域にも形成された。過去の親魚量高水準期にも同様の傾向が見られた。
- ・ 漁期後半は、北部海域が主漁場となる。【ただし、北部海域が継続して冷水域に覆われると、三宅島周辺海域で漁場形成が継続する。】
- ・ 犬吠埼以北の水温が高いと南下しない場合がある。【2008 年漁期は 1、2 月に常盤海域～鹿島灘に暖水が波及していたため、南下しなかった。】

漁況

中熟期は水温が 16℃を超える暖水が波及する瀬に、産卵盛期には 18～20℃の暖水が波及する瀬に集群して、好漁となる。

魚体

漁獲物の体長組成から、大型個体が小型個体より先に来遊する。漁期終盤には、大型魚の割合が増える。

北上期

伊豆諸島海域の水温が 20℃以上になると北上を開始し、漁場が消滅する。伊豆列島線上の 5、6 月における黒潮流軸の水温は 22℃から 25℃に昇温する時期なので、伊豆諸島海域が冷水渦に覆われる場合は漁場が継続する（例：2007 年漁期）。

その他

予報及び漁況経過における前年比の目安は表 1 のとおりとする。

表 1 来遊量及び漁獲量の評価の目安

予 報		漁況経過	
	前年比		前年比
前年を下回る	-20%以下	前年を大きく下回る	-20%以下
前年並	-20%より大きく+20%未満	前年を下回る	-20%より大きく-10%以下
前年を上回る	+20%以上	前年並	-10%より大きく+10%未満
		前年を上回る	+10%以上+20%未満
		前年を大きく上回る	+20%以上

【マサバ資源管理】

マサバの資源量は 1990 年頃から低迷が続いていたが、2013 年級群が卓越して高い加入量であったことから、資源量、親魚量とも増加傾向が続いている。また、現段階では 2018 年級群は 2013 年級群を上回る加入尾数と推定されているが不確実性は高い。

2021 年度の資源評価では、親魚量の動向は増加傾向にあるが、親魚量の水準はMS Yを実現する水準を下回り、漁獲圧はMS Yを実現する水準を上回ると判断された。このことから、今後安定的に親魚量の維持、増大、加入量の安定を図るためには、引き続き未成魚の保護をはじめとした管理措置が重要である。

②ゴマサバ

【予測（2022 年 1～6 月）】

（ア）来遊量と漁獲量

前年を下回る。

（イ）漁期・漁場

期間を通じて、伊豆諸島北部海域（ひょうたん瀬、高瀬、利島等）に漁場が形成される。黒潮流路によって、一時的に銭洲周辺海域や、三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

（ウ）魚体

尾叉長26～33cmの2歳魚（2020年級群）を主体に、26cm以下の1歳魚（2021年級群）、29～37cmの3歳魚（2019年級群）、30cm以上の4歳以上（2018年級群以上）が混じる。

※年齢は年初に加齢し2022年時で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

来遊量と漁獲量

全年級群を合わせた来遊水準の予測には、年別の 1～6 月と前年の 7～11 月棒受網 CPUE の相関関係（図 1）を使用した。今回の予測期間（2022 年 1～6 月）の来遊水準は前年の 77%と推定される。また、明け 1～3 歳魚の年級群別の来遊予測には、例年、小川港所属のサバ棒受網船 2 隻の標本船日報から算出した海区ごとの棒受網 1 揚網あたりの漁獲量と年齢別漁獲重量から算出した、各年級群の前年 7～11 月の資源密度指数と 1～6 月の資源密度指数の相関関係を用いていたが、近年の資源量低下に伴い、予測精度が低下している可能性があった。そこで資源状態を表す指標として、令和 2 年度ゴマサバ太平洋系群資源評価において示された親魚量（SB）と、MSY を実現する水準となる親魚量（SB_{msy}）の比（以下、SB/SB_{msy}）を用いた。SB/SB_{msy} が 1 以上の年（親魚量が MSY を実現する水準を上回った、資源状態が良い年）と 1 未満の年（親魚量が MSY を実現する水準を下回った、資源状態が悪い年）の年級群に分けて分析した。その結果、SB/SB_{msy} が 1 未満の年の年級群の場合、明け 1 歳魚、2 歳魚及び 3 歳魚においてそれぞれ相関関係が見られた（図 2）。令和 2 年度ゴマサバ太平洋系群資源評価によると、2015 年以降、資源全体の SB/SB_{msy} は 1 未満であるため、今回の来遊予測では SB/SB_{msy} が 1 未満の年の年級群における資源密度指数を用いた。

1 歳魚（2021 年級群）について、2021 年 7～11 月の累積資源密度指数は前年の 1,301%と大きく上回ったが（図 2）、7～11 月の棒受網による漁獲割合は 6%であった。そのため、来遊量が極めて少なかった前年を大きく上回ると考えられるが、今漁期における漁獲の主体とはならないと考えられる

2 歳魚（2020 年級群）について、累積資源密度指数は前年の 458%と推定され（図 2）、また 2021 年 7～11 月の棒受網による漁獲割合は 53%であった。そのため来遊量は前年を大きく上回り、今漁期における漁獲の主体となる。

3 歳魚（2019 年級群）について、累積資源密度指数は前年の 66%と推定され（図 2）、また 2021 年 7～11 月の棒受網による漁獲割合は 16%であった。そのため来遊量は前年を

下回り、今漁期における漁獲の主体とはならない。

4 歳魚（2018 年級群）以上について、これまで 4 歳魚以上の残存資源は多くないと予測していたが、2021 年 1～6 月には三陸海域からの回遊と思われる 4 歳魚以上の産卵親魚が多く漁獲されたため、当該漁期においては漁獲割合が 44%と主体となった。2021 年 7～11 月の棒受網による漁獲割合は 18%であったため、現段階では今漁期における漁獲の主体にならないと思われるが、前年と同様に三陸海域から産卵親魚の来遊があった場合には漁獲の対象となる。

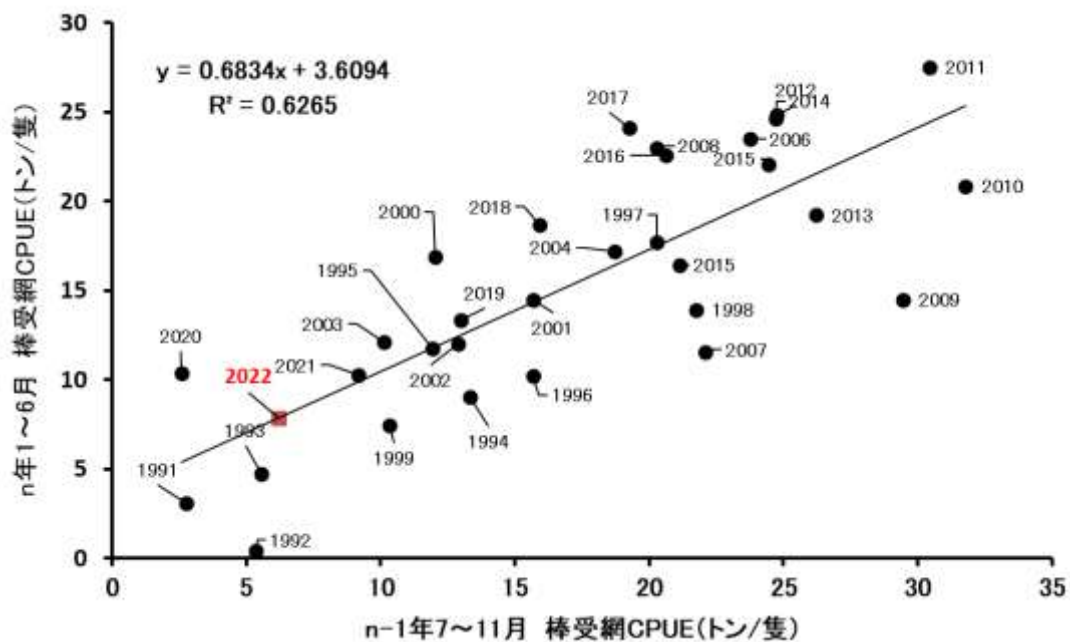
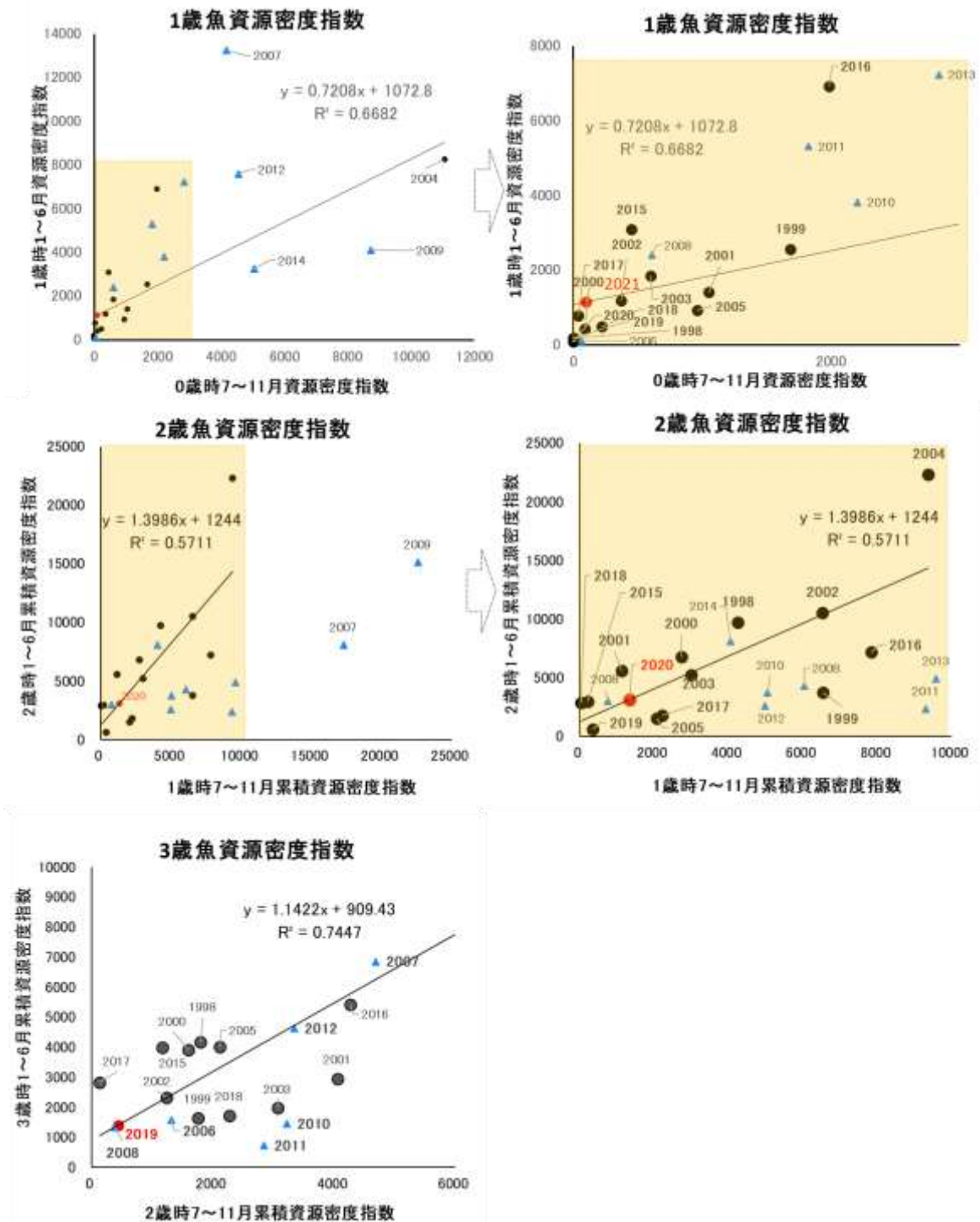


図1 (n-1) 年 7～11 月の棒受網 CPUE と n 年 1～6 月の棒受網 CPUE との関係
* 図中の数字は年を示す。



- …令和2年度資源評価報告書にて $SB/SB_{msy} < 1$ となった年の年級群
- ▲ …令和2年度資源評価報告書にて $SB/SB_{msy} \geq 1$ となった年の年級群

図2 (n-1)歳時7~11月の棒受網資源密度指数と、n歳時1~6月の棒受網資源密度指数との関係(図中の数字は年級群)。資源状態を表す指標として、親魚量(SB)と期待される漁獲量がMSYとなる親魚量(SB_{msy})の比率(SB/SB_{msy})を用いた。回帰直線は SB/SB_{msy} が1未満となる年の年級群に対して引いたもの。

漁期・漁場

例年では主漁場は三宅島周辺海域や銭洲周辺海域であるが、令和 3 年は黒潮大蛇行により、当該海域周辺が黒潮の影響を強く受けたことで漁場となる機会が極端に少なかったこと、加えて令和 4 年 1 月以降も黒潮大蛇行が継続することから予測した。

魚体

年齢については、漁場に来遊する年級群毎の加入水準、2021 年 7～11 月の漁獲状況から予測した。魚体については、近年における棒受網の年齢別尾叉長モードから予測した。

2 経過と現況(2021 年 7 月以降)

(1) 海況

黒潮は、期間を通じ A 型で推移した。大蛇行後は、伊豆諸島海域の西側を北上し、石廊崎～御蔵島付近を通過する流路をとることが多く、7 月下旬～10 月上旬に石廊崎へ繰り返し接近した。また、期間を通じて、黒潮の蛇行北上部から遠州灘、駿河湾および大島西水道へ断続的に暖水が波及した。

房総沖では、8 月に一時的に離岸したものの、概ね接岸傾向で推移し、暖水波及の影響が見られた。

1 月 5 日現在、黒潮は、四国沖から紀伊水道沖で蛇行した後、北上部が潮岬に接岸し、銭洲～三宅島付近で南へ迂回した後、房総沖を北東に流れている。漁場水温は、伊豆諸島北部 18～19℃、三宅島 19℃、銭洲海域 19～20℃であった。

(2) 漁況

(ア) 秋季まき網漁業

北部まき網による7～12月のさば類漁獲量は61,416トン(速報値、去年同期80,263トン)であった。そのうち銚子港のさば類漁獲量は31,659トン(速報値)で、うちマサバが31,289トン(速報値)、ゴマサバが370トン(速報値)であった(去年同期のさば類漁獲量は36,549トンで、うちマサバが32,703トン、ゴマサバが3,846トン)。銚子港への水揚げは、昨年並に遅い11月下旬から本格的となったが12月下旬まで漁況は好転しなかった。

7月上～下旬は犬吠埼沖でマイワシやマアジに混じって漁場が形成され、8月上旬以降、三陸北部海域に北上し、銚子漁港への水揚げは2そうまきによるウルメイワシやマアジに混獲される程度になった。9～10月は三陸北部海域が漁場の中心となり、11月上旬から中旬に三陸北部～常磐北部海域に漁場が南下した。11月下旬になり三陸南部～常磐南部海域で南下群を対象とした本格的な操業が始まったが、銚子港への1日3,000トンを超える水揚げは11月までにはなかった。12月上旬から、鹿島灘沖～犬吠埼沖に漁場が形成され、1日3,000トンを超える水揚げもあったが魚群は薄群れであった。12月下旬になり、犬吠埼沖でまとまった漁場が形成され、銚子漁港並びに三陸各地に水揚げされた。2021年12月の緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均は15.7℃であった。(2020年12月:13.5℃、2019年12月:16.0℃、2018年12月:17.6℃、2017年12月:15.3℃、2016年12月:17.1℃、2015年12月:15.0℃、2014年12月:14.7℃、2013年12月:15.4℃、2012年12月:16.5℃)

北部まき網で2021年11月以降に漁獲されたマサバは、28～35cmの明け4歳魚(2018年級群)～明け5歳魚(2017年級群)が主体となり、26～28cm前後の明け3歳魚(2019年級群)と35cm以上の明け6歳(2016年級群)以上が混じった。

このうち11月は31～34cm前後が主体であり、南下群の漁獲が本格的となった12月の魚体には34～36cmの大型魚も加わった。

一方、ゴマサバは12月以降北部まき網の漁獲物への混獲はほとんど見られない。

年明け後は 1 月 6 日の晩から操業が始まった。漁場は犬吠埼沖で、北部まき網全体で 2,250 トン（暫定値）が水揚げされ、うち銚子漁港への水揚げが速報で 1,739 トンであった。犬吠埼沖の漁獲物は 32～36cm（400～500g）主体のマサバで、300g 台が 1～2 割、700g 以上が 1 割程度混じった。投網回数（最大 4 回）を重ねるほど魚体サイズが小さくなり、CPUE も低くなる傾向があった。

（イ）沿岸さば釣り

神奈川県主要 3 港（松輪、三崎、長井）における 2021 年 7～11 月の立縄釣り、ビン釣り（通称、かかりサバ）及びハイカラ釣りによるマサバの漁獲量は 7 t で、前年（30t）および平年（31t）を大きく下回った。ゴマサバの漁獲量は 3 t で、不漁であった前年（4 t）および平年（11t）を下回った。

千葉県外房海域では、鴨川市漁協所属船のハイカラ釣りは、前年と同様に 12 月は出漁していない。

（ウ）定置網

外房沿岸の定置網では、12 月下旬までマサバのまとまった漁獲はなかった。

神奈川県主要 4 港（三崎、長井、佐島、真鶴）における 2021 年 7～11 月の定置網によるマサバの漁獲量は 190 t で、前年（486t）および平年（464t）を下回った。ゴマサバ漁獲量は 146 t で、同様に前年（191t）および平年（215t）を下回った。

（エ）静岡県棒受網・たもすくい網

黒潮流型は、期を通じて A 型で推移した。また、伊豆諸島周辺海域においては、黒潮流路が北偏し、例年主漁場となる三宅島周辺海域が常に黒潮流路内となっていたことから、期を通じて同海域に漁場が形成されず、漁場は北部海域のみに形成された。月別にみると、7 月は北部海域のひょうたん瀬に漁場が形成され、CPUE は 7.7 トンと漁況は低調であった。8 月も引き続きひょうたん瀬が漁場となり、8 月上旬には CPUE が 15.2 トンと漁況は好転したが、中旬には 0.3 トンと再び低調となった。9 月には漁場は大室出しへと移ったが、CPUE は 4.0 トンと引き続き漁況は低調であった。10 月上旬も引き続き大室出しに漁場が形成されたが、CPUE は 5.7 トンと漁況は低調に推移した。その後、利島に漁場が形成されると、全船たもすくい操業に切り替えた。利島での操業は 10 月下旬まで継続し、漁獲量は 101 トン、CPUE は 10.1 トンであった。11 月上旬も引き続き利島に漁場が形成され、CPUE は 19.2 トンと好転した。中旬以降は大島千波に漁場が形成され、中旬は CPUE が 7.3 トンと低調であったが、下旬には 17.4 トンと好転した。12 月も引き続き大島南部海域に漁場が形成され、CPUE は上旬が 25.7 トン、中旬が 14.0 トン、下旬が 21.8 トンと月を通じて高い値を示した。2021 年 7～12 月における静岡県主要 4 港（沼津、小川、伊東、静浦）におけるさば類の水揚量は、ゴマサバ 773 トン（前年の 55%、平年（直近 5 年平均）の 49%）であった。CPUE は 9.8 トン（前年同期 9.9 トン）であった。マサバの水揚量は 0.1 トンであり、稀に混じる程度であった。

漁獲されたゴマサバの尾叉長範囲は 22～38cm であった。年齢別漁獲尾数の割合は、0 歳魚（2021 年級群）が 6.0%、1 歳魚（2020 年級群）が 53.3%、2 歳魚（2019 年級群）が 15.7%、3 歳魚（2018 年級群）が 18.2%、4 歳（2017 年級群）以上が 6.8%であり、1 歳魚が漁獲の主体となった。

なお、年明け後も引き続き大島千波にて操業し、1 月 5 日に 16.7 トン、6 日に 19.5 トンを漁獲した。漁獲物はすべてゴマサバで、尾叉長 30～39cm が主体であった。

（オ） たもすくい網

2021 年 7～12 月における神奈川県主要 2 港（長井、三崎）には、たもすくい網によるさば類の水揚げはなかった。

2021 年 12 月に千葉県民間船が大島千波海域で操業し、9～14 トンのゴマサバを漁獲した。マサバはわずかに混じる程度であった。

3 漁期前調査結果

（ア） 千葉県

千葉県漁業調査船千葉丸による調査は、1月7日現在行なわれていない。

千葉県漁業調査船ふさみ丸は、2021年11月17日、12月14日、15日、22日に九十九里沖、外房（勝浦沖）、野島埼沖でハイカラ釣りによる調査を実施し、21～37cmのゴマサバを釣獲した。マサバは12月14日、22日の九十九里沖（ミゾ場）で混じる程度で漁獲され、大きさは尾叉長29～39cm（モード32cm）、体重モード250gであった。また、2022年1月6日に同じく九十九里沖（ミゾ場）で、マサバが漁獲され、大きさは尾叉長30～39cm（モード36～37cm）、体重モード400～450g、ゴマサバは混じらなかった。

（イ） 神奈川県

神奈川県漁業調査指導船江の島丸による調査は、1月7日現在行なわれていない。

（ウ） 静岡県

静岡県沿岸・沖合漁業指導調査船駿河丸による調査は、1月7日現在行なわれていない。